

＜ 長崎の観光に関連付けたプロジェクト型学習の教育効果 （学部横断的グループの場合） ＞

研究期間 平成 29 年度

研究代表者名 山田健太郎

共同研究者名 松尾晋一

ニール・ミリントン

ウィリアム・マクドナルド

0. はじめに

本研究は、プロジェクト型学習の教育効果についての研究の一環として、学習集団のダイナミクスについての可能性と問題点を明らかにすることを目的とした事例研究である。長崎県にある公立大学で学ぶ学生に広く関心があり、一定レベルの動機づけが期待できる内容として、長崎の観光に関連付けるプロジェクトを企画し、その上で、今回は学習集団のダイナミクスを探るべく、学部の異なる学生に参加を募り、学問的背景の異なる集団という構成からどのような効果が期待できるのかを調べた。言い換えれば、異なる所属の学生が参加するプロジェクト型学習には、どのような可能性があり、どのような問題があるのかについての事例研究である。基本的には同様の先行研究がまだほとんど見られない、基礎的段階の研究であるので、参加学生からのアンケートとその後の聞き取り調査でデータを収集することとした。

1. 研究の方法

今回の研究における学生が参加するプロジェクトとしては、グラバー園のプレゼンテーションを設定した。最終的には外部の人の前で発表をするという目標を掲げ、それに向けてリサーチ、プレゼンテーション内容の作成と仕上げ、そして発表へと進むプロジェクトである。

参加学生は、国際社会学科から 2 名、公共政策学科から 3 名であった。プロジェクトが課外活動のため、日程調整等の必要を考慮して、募集をゼミと長崎通訳ガイド研究会等を通じて行ったのではあるが、なかなか一定数の学生参加を得るのには困難が多いのが現状である。課外活動や授業外のプロジェクトへの参加は、本学の教員により様々な実践が行われているが、一方でより多くの学生が授業以外の自主的な学びの機会に参加できるようになるためのさらなる啓蒙など、今後の課題は多いといえよう。

グループの構成については、学科ごとのグループを 1 つずつとした。これは、佐世保キャンパスとシーボルトキャンパスに距離があり、学生同士の頻繁な相談が難しいことから、学科混成グループを 2 つとするのが難しいと考えたのがひとつ、それぞ

れの学生の学科の学びとの関連性を意識した展開をするのが、より良い動機づけとなるのではないかと考えたためである。国際社会学科のグループは海外の人を意識した英語でのプレゼンテーション、公共政策学科の学生は国内の旅行客を対象にした日本語でのプレゼンテーションをプロジェクトの目標とした。プレゼンテーションの長さは 10 分程度とした。

一方、上記のようなプロジェクト進行では、2 つの学科の学生間の学び合いが起こらないので、最終発表の前に何度か中間発表の交流機会を設けることとした。

2. 研究の経過（プロジェクト）

1) プロジェクト準備（学生）

まずは本研究のプロジェクトの準備を学生にさせるため、グラバー園で現地調査を行った。公共政策学科のグループ 11 月 15 日に、国際社会学科のグループは 11 月 19 日に実施した。

さらに、基本的な情報として『グラバー園への招待（長崎游学マップ）』を教材として購入し、学生に与えた。国際社会学科の学生には、英語プレゼンテーションの参考として『英語でプレゼン・スピーチ 15 の法則』と『20 ステップで学ぶ日本人だからこそできる英語プレゼンテーション』を追加的に与えた。

2) 中間交流

研究開始当初は中間発表を 2 回程度予定していたが、実際に日程調整をしたところ、教員と全参加学生の都合が合う日時がないことが判明した。そこで代案として、プレゼンテーションの中間段階のパワーポイント・スライド及び作成に当たって特に留意したポイントを説明した文書（フォームは教員が作成）をお互いに交換することで、お互いのプロジェクトの視点の違いに気づき、それを参考に自分たちのプレゼンテーションを改善するようにした。交換は 1 月上旬に行った。中間交流の後、それぞれのグループは指導教員の示唆を受けながらさらにプレゼンテーションの仕上げ作業に入った。

3) 発表会

平成 30 年 2 月 14 日に長崎県立大学シーボルト校キャンパスにおいて、発表会を行った。今回のプロジェクト参加学生以外に数名が来場した。グラバー園指定管理者長崎南山手グラバーパートナーズからは、日程が合わなかったため、残念ながら出席者が得られなかった。

それぞれの発表の後、プレゼンテーションについてコメントを会場から受け取ることができた。全体的な構成や、着眼点については、一定の評価を受けた一方で、メッセージを強くするなど、より印象的なものとするための意見も出された。学生にとっ

ては、今後のプレゼンテーションをする上で大いに参考になるものであった。



3. アンケート調査と考察

今回のプロジェクト参加の経験が、とりわけ別の学部の学生と共有しながら進めた経験が、学生にとってどのような教育的価値のあるものと認識されたのか、あるいは逆にどのような点が不足していると感じたのか、アンケート調査によってデータを収集した。

質問項目としては、本学の全学教育において、あるいは所属する学部での学びと本研究で取り組んだプレゼンテーション・プロジェクトの関連性の意識について問うもの、他のグループの進行状況を見ながらプレゼンテーションを仕上げる形式についての意見、他学部の学生のプレゼンテーション作成を身近に見ることから考えたこと、を記述式で書かせ、さらに学習の取り組み状況や満足度について訪ねた。

回答は 5 名参加者中 4 名から得ることができた。以下、それらの結果から見えたことを紹介する（質問項目の詳細については付録参照）。

まず、プレゼンテーションの取り組み全体に必要なとした時間数について訪ねた質問に対する回答は、「5 時間以上 10 時間未満」のグループ（公共政策学科）と「10 時間以上 20 時間未満」のグループ（国際社会学科）に分かれた。プロジェクトの本格的な作業が後期の後半となった中で、課外活動であることもあり、なかなか多くの時間を学生が取れない実情がうかがえる。国際社会学科グループは英語でのプレゼンテーションであったことから、より長い時間が必要であったことが考えられる。

満足度については、すべての回答が 5 段階評価の上から 2 番目（ある程度満足した）であった。学生の参加募集をした際に他学科との交流ということを目指して進めたが、さまざまな事情から、今回の交流はかなり限定的なものになってしまったことが、やや満足度の不足として現れている可能性がある。ただし、後述するように、新しい視点や気づきがあったと認識している点もあり、その意味においては、有意義な学習機会となっていたと考えられる。

プロジェクトの学習効果については、学生の自己分析として「プレゼン能力」や「発表をする力」があがった。プロジェクトの目標がグラバー園についてのプレゼンテーションであるので、ある意味当然予想されることではあるが、一方で、初年次教育や「しま」教育をすでに経ている学生のコメントとしては、すでにある程度経験しているはずの能力であるのが、気になるところである。これまでの授業におけるグループ学習では、他の学生が中心になってプレゼンテーションを行うことが多かったということであろうか。あるいは、今回は2つのグループそれぞれに対して指導教員がアドバイスを中間発表（交流）からしており、その中でプレゼンテーション内容についても修正意見を与えているので、そのようにプレゼンテーションを教員による指導を受けながら仕上げる経験がこれまであまりなかったということであるのかもしれない。

本研究のねらいとした学部横断の参加学生とした点に関連するものとしては、参加したプロジェクトで得たこととして、「違う視点での考えや意見が得られた」という回答がどちらのグループにもあり、異なるカリキュラムで学習する他学部の学生と同じプログラムに参加することが、それぞれの学びの視野を広げることにつながる可能性を見ることができた。また、シーボルト校のグループが英語によるプレゼンテーションを行ったことに対して、佐世保校の学生の回答には、自分も「英語で日本のことが説明できる力を身につけたい」という内容もあり、これも学部の枠を越えた学びに向けての視野の広がりを示唆するものとしてとらえられよう。一方、「授業の一環とするなどして時間を合わせ」て、「何度か集まって意見」交換をするというのではないかと、という意見も回答の中にあっただ。より密度の高い交流を求める当然の声として、今後考えていきたい問題である。

4. まとめ

学部横断の学びの場とするプロジェクト学習にはさまざまな越えるべき障壁があることが、本研究で見えてきた。たとえば参加学生の日程調整などは、溝上・成田（2016）に報告された事例にも同様の苦勞が述べられているように、なかなか難しい問題である。日程調整の問題を解消できるようなどのような情報交換の方法があるか、今後の課題としたい。

また、プロジェクトそのものの学習の深さについても改善の余地があると考え。プレゼンテーションなどのプロジェクトについては、できれば外部の意見を数回受けながら仕上げていくのが、本来のプロジェクト型学習の姿であろう。今回取り組ませたプロジェクトは、その意味でまだ工夫の余地が大きく残っていると考える。実施期間が限られていると難しいことではあるが、より深い学習となるためにはどのようなことが可能であるのか、またそのような中で、学部横断の学生による構成はどのような利点・問題点となりうるのか、これらについての考察は今後の課題としたい。

参考文献

- 愛場吉子 『一流ビジネスパーソンが無意識にやっている 英語でプレゼン・スピー
チ 15 の法則 25 のスライドタイプで鍛える』 三修社, 2017
- 藤尾美佐 『20 ステップで学ぶ 日本人だからこそできる英語プレゼンテーション』
株式会社 DHC, 2016
- ブライアン・バークガフニ 『グラバー園への招待』 長崎游学マップ 5 長崎文献
社, 2011
- 溝上慎一・成田秀夫編 『アクティブ・ラーニングとしての PBL と探求的な学習』 東
信堂, 2016

付録（アンケート用紙）

グラバー園プレゼンテーション・プロジェクト 2017 年度活動まとめアンケート

今回の活動にご参加いただきありがとうございます。今後さらに楽しく、また教育的にも意義深い活動
を考えていく上での参考になるように、ご意見・感想を聞かせてください。

国際社会学科 山田健太郎
公共政策学科 松尾 晋一

Q1. 所属学科を教えてください。

_____ 学科

Q2. 現在の学年を教えてください。

_____ 年生

Q3. 今回の活動のために、全体として何時間くらい使いましたか？選択肢でお答えください。

a. 5 時間未満 b. 5 時間以上 10 時間未満 c. 10 時間以上 20 時間未満 d. 20 時間以上

回答として選ぶ選択肢の記号は_____

Q4. 今回の活動についての満足度はどのくらいですか？選択肢でお答えください。

a. 満足した b. ある程度満足した c. どちらともいえない d. あまり満足しなかった。 e. 満足しなかった

回答として選ぶ選択肢の記号は_____

Q5. 今回の活動を通して、どのような能力が伸びたと思いますか？1つから3つ、挙げてください。

1. _____

2. _____

3. _____

Q6. 今回の活動で、難しいなと感じたことはありましたか？1つから3つ、挙げてください。

1. _____